

Title	W・ホフマン 英国に於ける工業生産の発展：量的研究
Sub Title	
Author	新保, 博
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.11 (1951. 11) ,p.697(71)- 698(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19511101-0071
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511101-0071">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511101-0071</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つた移動は除外される。』というのは今迄の北部の勞働力の供給はヨーロッパからの移民で充分であつたが、戦時生産の爲、白人は高賃銀を支拂う工業の方へとられ、サーヴィス業に關する職業があき、そこへ黒人が入込んだのであつた。黒人が工業へ吸収される様になつたのは第二次大戦中であつて、それ以前ものは少かつた。あくまでも人の下積となつてゐる黒人は、白人と同等には生存競争に堪えられないため、南部から一家を引きつれて北部へ移動してくるにしても經濟的に敗北し、一家は崩壊せざるを得ない事が多かつた。というのは歌、小説に描かれる程一家の主人が生活に追われその貧窮から逃げるため、失踪してしまふのであつた。

Fraser はこの事を *Father on leave* と云つてゐる。そしてこの時期からニューヨークのハーレム、シカゴ、ピッツバーグの黒人街の歴史が作られていつたのであつた。前に述べた二階層が變形し、職業別の分裂が生じた。しかし黒人の中産階級なるものが發生したのは第二次大戦の影響が強かつた。勿論これと同時に *brown middle class* に対し *black proletariat* が發生した。

家族の固定化、編成等は黒人の經濟状態に直接反映し、この點から見て母權が父權に移行して行く過程も第二次大戦による所が大きといえよう。

黒人の歴史ははまだ九十年たらずのものであり、前述の如く

他の移民とはアメリカに於て異つた發展過程を持つてゐるが、同じ人間社會構造のパターンにそつて進歩しながらも、刺戟に對する感受性が強かつたと見られる。Fraser のいう今後の黒人の發展、とくにアメリカの白人種との融合については、次の五つがあげられる。即ち一つには、南部の農村經濟事情が現在の如く續くものであれば、黒人の農村から都市へ、南部から北部への移動はさげ得ない。二つには大都市へ流れ込む黒人は依然として貧民層を形成し、貧困に襲われて家族は崩壊せざるを得ない。三つには過去の移動と異なる點は、人種差別的のラインも大きい。職業的差別的のラインがより強くなり、白人と肩を並べてプロレタリアート層を形成してゆくであろう。四つには、これから益々黒人の孤立的な社會は崩壊し、それに伴つて家族の編成も亦變るであろう。そこでアメリカの白人種との融合の度合は、今後は離婚よりもむしろアメリカ經濟の動向により決定せられ、黒人がその構造内部にどの程度参加するかによつて定められて行くであろう。即ち Fraser は民族差別問題の重要性、及びこの問題の解決、そして最後に黒人家族の形態を今後のアメリカ經濟いかによるものであるといわんとしている。

かくて本書は獨り社會學的觀點からのみならず、經濟的見地から見て、黒人問題がアメリカ經濟にとつて占める意義を理解する上に役立つ文献といつて差支えないであろう。

### 論文紹介

W・ホフマン

『英國に於ける工業生産の發展——量的研究——』  
(W. Hoffmann, "The Growth of Industrial Production in Great Britain: A Quantitative Study." *Economic History Review*, 2nd Series, vol. 2, No. 2, 1949, pp. 162-180)

本稿は英國工業生産高の變化の量的分析に對する一試論である。物量的生産のみを取扱い、生産高の價值や生産費の指數を作成しようとするものではない。然し物量的な生産額の數字も常に得られるとは限らない。従つて本稿においては十八世紀では總生産額の約五〇%、十九世紀及び二十世紀では七〇—八〇%に當るものを採り上げ得るにとどまる。扱つて一七〇〇—一九三五年の總工業生産高指數によれば、英國工業の發展は繼續的であつて大きな停滞乃至減退の状態はない。この期間は發展率の相違によつて三段階に分たれる。即ち一七〇〇—一八〇〇年は一・九、一七八一—一九一三年は二・八、一九二一—三五年は一・九の發展率を示しており、これを初期工業化の時期、發展しつつある資本主義の時期、最近の發展緩慢化の時期と呼ぶことが出来る。實質國民所得の發展率は一八八〇年代及び九〇年代には増大したが、一九〇〇年以降は減退しておりこの變化は

恐らく永續的なものであろう。

次に異つた工業群の發展率の相違に就て見れば、工業化の過程に於て資本財の生産高は消費財のそれよりも急速に増大する。一八一九—一九一三年の夫々の發展率は二・五及び一・六である。かくて消費財生産の或る増加率は生産財の一層急速な増大率によつて伴われる事が量的に確認される。また或る工業の輸出可能性は發展率を増大する。その適例は木綿工業である。綿糸綿布共に消費財全體の發展率よりも高い率を示した。この逆の例は製粉業であつて、完全に國內市場に依存するため平均以下の發展率を示している。

一八八〇年以降消費財の輸出割合は漸減したが、生産財は現在迄上昇し續けている。輸出が殆んどないにも拘らず國內市場に於ける需要の増大に基いて、平均以上の發展率を持つ工業がある。かかる工業には、實質所得の増大につれて一人當りの消費高が増大する工業(糖菓、紙、印刷等)と、古い工業に代つて自らの市場を創出する新工業であるために異常な發展率を示す工業(アルミニウム、ゴム、人絹、電氣用品、自動車等)とがある。尙若干の例では、發展率の相違は輸入品との競争に基く。或工業(絹、錫、亜鉛)は海外からの強い競争に直面して生産高が絶對的に減少したが、他の工業(染料)では國家の保護或は補助金により急激な發展率を示した。

工業の發展には、高い又は増大しつつある發展率を示す場

合、低い又は減退しつつある發展率の場合、そして生産の絶對的減少という三つの局面がある。英國でかかる發展の最も典型的な例は、造船業と銅採鑛業であつて、前者についていへば、十九世紀初年から増大する發展率を示していたが、一八四三年を境として増大率は減退し続け、遂に一八〇六年以降生産額の絶對的減少を生ずるに至つてゐる。ところで發展率が増大しつつある局面は、四十五種の工業の中で二十五の工業に見られる。この最初の段階を通過した工業の殆んど全部が基礎産業即ち木綿、羊毛、造船、建築、材木、皮革、食料品工業である。發展率の増大から減退への轉換は通例甚だ判然とした形で起り、一度轉換點を通過するや發展率は二度と上昇しない恆である。この發展率が緩慢化する局面は四十五種工業中四十二に見られるのであつて、英國の殆んど全ての工業が第二の段階に達してゐる。それは黄麻やアルミニウムの如き比較的新しい工業に於ても見られるところである。最後に生産高が減少する段階に達してゐるのは、四十五種工業中十八で、絹、麻、黄麻、ビール、麦芽、アルコール、造船、鐵道、木材、銅錫を含む殆んど全ての鑛石採掘等の諸工業を含んでゐる。或工業に於ける生産高の衰退の理由は少くとも三つある。第一は技術的變化、第二は財政政策即ち商品に對する課税、第三は國內國外兩市場に於ける外國との競争である。

英國の全工業生産は、十八世紀及十九世紀初頭は發展率が増

大してゐた。一八二〇年頃が轉換點であつて、その後一八六〇年代迄は發展率は不變であつたが、それ以降發展率は減少した。十八世紀及第二次大戦直前の數年間の發展率年一％に對し、一八二〇一六〇年は年三％であつた。従つて個々の工業の發展の型は工業生産高の全體の中に反映してゐる。消費財は一八三〇年迄は發展率が増大し、それ以後發展率は減退した。資本財も同様であつたがただ轉換點が一八四七年であり、一八二〇一四一四年迄は消費財に比して高い發展水準を示してゐた。發展率の緩化の原因は四つある。第一は外國の工業化で、その結果國內市場と海外に於ける競争が激化する。第二は貿易政策で、外國との競争が國內生産に與える影響は、自由貿易が保護貿易かによつて左右される。第三は古い工業國に於ける重要原料の渾濁である。第四は進歩せる工業社會、古い工業國では新發明の導入による生産費の引下が困難な事である。

(新保 博)

W. ルーパート・マクローリン

『技術的更新の過程——新科學工業の開始』

(W. Rupert MacLaurin, "The Process of Technological Innovation: The Launching of a New Industry." The American Economic Review, Vol. 40, No. 1, March, 1950 pp. 90—112.)

シユムペーター教授の暗示によつて、最近經濟發展に於ける

經營の役割を高く評價する傾向が現われて來たが、本論文の目的も近代的産業—無線—を開始するに當つて、更<sup>イノヴェイション</sup>新<sup>イノヴェイション</sup>がどの様にして行われるかといふ過程を論ぜんとするにある。經濟學者は産業の變動を分析するに當つて、可測資料によつては取組む事の出来ない多くの重要な問題を取上げねばならない。技術的發展の顯著な二十世紀にあつては、經營者としての優劣は、生産費——價格の決定よりも、新たに造られたものを如何に巧みに企業に取入れるかといふ創造的才能に懸つてゐる。以下においては商業的無線が始まつた一八九〇年——一九二二年の無線工業をこの點から分析して見よう。

一、技術的發展の立場から産業を分析するには、基礎になる科學の状態又は發展度を評價する事が必要だが、フアラデー、マクスウェル、ハーツ、トムソン等の先驅的研究以來新しい基礎的研究は發展を見て居らず、今日では直ぐに役立たない研究には研究費が與へられぬという危険がある。

二、科學と實用的技術の發達は、理論家と實驗家と發明家との共同によつて最も著しく進歩する。十九世紀の産業主義時代には、熟練した技術者は科學者の發見を新産業に應用する事に興味を抱いた。電氣技術部門に關しては、科學的訓練を受けた青年達マルコニ、ド・フォレ、ヘッセンデン等はその例である——が先驅者の危険を冒した。

三、一九一〇年代に電氣産業に獨占が成立したが、其にも拘ら

ずアメリカの實業家は「競争といふ不斷の烈風」を意識して、研究と技術的向上を怠らなかつた。例へばデネネラル・エレクトリック會社は附屬の基礎的研究所と多數の科學者とを擁し、無線科學技術を大いに發展せしめた。他方ウエスタン・ユニオン・エンド・ポスター・テレグラフ會社は、契約による既得分野の保護という方法を採つたが、無線電信や海底電線のような保護された分野が餘り重要でなくなるといふ危険を伴つた。右の如く、獨占企業の技術的發展に對する態度には二つの型があり、その一は出来る丈早く研究所を設け、その研究成果如何が直ちに彼等のパンとバターに關係して來る型であり、その二はヨリ古い、産業に多い、云わば店頭裝飾的態度を探り、新しいものを急速に取入れる事には何等の興味をも持たない型である。兩者の相異は、企業の形式的・制度的組織よりも、主立つた企業者の人格によるものと思われる。

四、十九世紀末から二十世紀初にかけて、投機的投資に對して何等の障もなかつたが、少數の例外的成功を除いて、破産の割合は高い。大企業は幾分官僚的となり、新しい着想や危険を伴う様な事業には容易に手を出さなくなつた。従つてこの様な冒險的事業に資本の流入を確保する爲には特別の努力が拂はねばならぬ事は理解出來よう。

五、以上に於て、新企業を成功裡に始めるには特殊の經營技術が重要である所以を述べた。即ち、夢を追う大膽さ、「視野の